

日本鑄造 鷺尾 勝社長



—2022年度下期、23年度の市場環境をどう見ますか。

「下期は高生産高出荷を見込む。エンジンアリング事業は大型プロジェクト案件が納期変更で下期に集中し繁忙となっている。素材事業は半導体関連と建機が3〜4割を占めるが、どちらも好調。全体的に市場環境はよく、工場はフル生産を超えている。高レベルの事業環境は23年度も続くだろう」

「来年度で中期経営計画が終わる。計画では売り上げ150億円、経常利益16億円。売り上げは達成できそうだが、想定外だったのは現在の原料・資源高だ。その中で利益を上げていくためにも、生産性改善、能力拡大の取り組みを進めていく。DX化、スマートファクトリー化のほか、整流化や日々の分析・改善で稼

2023 トップインタビュー サステナビリティ経営の針路

スマートファクトリー化で稼働率向上

化や他工場で製造する方向で検討している」
「DX化、スマートファクトリー化の取り組みは、大型半自動成型ラインにも展開する予定。作業状況は。」
「福山製造所で製造する物用手込み成型職場で開始し、22年4月から大物用手込み成型職場に横展開しており、大型半自動成型ラインにも展開する予定。作業効率は10〜20%以上、向上している。またAI解析に「キャスト」のオンライン受注システムが軌道に乗り、注システムが軌道に乗り、問い合わせの電話やメールが激減。川崎・大阪で8〜9割、福山では9割超減つた。その仕組みを川崎の鋼販売にも適用しようと動いている。営業が手入力し

働率を上げていく」
「各拠点固有の課題を解決することが課題。JFEスチール東日本製鉄所に位置する池上工場は、シームレスパイプ穿孔プラグの生産を止めた後は最低限の生産を行っており、OEM始めた。川崎工場では中小

「想定以上に順調、適用拡大」 独自開発の「湯切切断機」

る。対象範囲を拡大し稼働率アップに向けて動いている。砂型3Dプリンターは22年12月に設備が入り、現在は試運転中。実際に製品を作るのは来年度上期以降になる」
「最終的にはグリーン製品を売っていくことを目標としており、その一環としてISO14064-1を取得した。今のところ川崎工場のみだが、今後全社に展開していく。マスバランズ方式による低CO₂ 鋼製品は、今年度内に第三者機関による認証を取得し、来年度から販売する予定。販売先は建機部品・半導体を広げていく。素材材では低熱膨張合金材料「LEX」からサステナブルでない3Dプリンタ製品が軌道に乗ってきた。半導体製造装置向けで、半導体の好況によりモデルチェンジが遅れていたが、ようやく販売できそう段階になってきた」

「独自開発商品の販売は、今年度内に第三者機関による認証を取得し、来年度から販売する予定。販売先は建機部品・半導体を広げていく。素材材では低熱膨張合金材料「LEX」からサステナブルでない3Dプリンタ製品が軌道に乗ってきた。半導体製造装置向けで、半導体の好況によりモデルチェンジが遅れていたが、ようやく販売できそう段階になってきた」
（あべ みずき）